

津田青楓

1880年（明治13）9月13日〜1978年（昭和53）8月31日（97歳没）

画家、書家、歌人、随筆家、良寛研究家 漱石の『道草』『明暗』などの装丁も手掛けた。京都市中京区押小路に華道の家元の次男として生まれた。本名は亀治郎。明治44年頃から漱石山房に出入りし漱石の門人となる。漱石に絵を教えた。今様良寛と称賛された。



1880年（明治13）0歳、9月13日、父、西川源兵衛、母、みよの次男として京都に生まれた。



兄の一草亭

父は生け花の師匠だが、それだけでは生活できないので切り花の店をやっていた。長男は家を継ぎ、一草亭と号し、父の死後名声あがり、挿し花の弟子は京阪神、関東にも及んだ。次男亀治郎（青楓）は、母の生家（津田家）の養子となった。

1895年（明治28）15歳、この頃、商家（丁稚奉公をしていた）で働いていて面白くないので、学問をしたいと父に申し出たが・・・反対された。ある日思いつめて、商家を出て、家にも帰らず、織屋の職工や画家の居候をしながら自習したが、勉強はすすまなかった。（四

条派の升川友広に日本画を師事）

1896年（明治29）16歳、京都市立染織学校に入学。（1897年の間違いか、谷口香嶠に日本画を師事。同

校卒業後、同校の助手を務める。）『明星』と『ホトトギス』の論争を面白く読む。

1900年（明治33）20歳、関西美術院に通う。（浅井忠と鹿子木孟郎に日本画と洋画を師事）5月、漱石留学。

1902年（明治35）22歳、9月19日、正岡子規没（満34歳）

1903年（明治36）23歳、1月、漱石英国から帰国。5月、藤村操、華厳滝に投身自殺。

1907年（明治40）27歳、この頃、7年にわたる従軍の後、高島屋に勤め、絵の勉強再会。

山脇敏子（20歳）と結婚。この頃、大卒の就職難。



浅井忠



「山脇敏子」女子美術出身洋画家、服飾手芸家「山脇美術専門学院」創設者。日本の服飾デザイナーの先駆者。

1910年（明治43）30歳、帰国。（1909年の間違いか）大逆事件。日韓併合。

1911年（明治44）31歳、『ホトトギス』に挿絵などを発表。小宮豊隆の紹介で



安井曾太郎自画像
1913年（25歳）油画

漱石山房に行く。高田老松町に定住。漱石が訪問。

5月、長女あやめ出生。6月、この頃から漱石の木曜会の常連となる。

漱石が朝日新聞に挿絵画家として紹介してくれたが採用されなかった。

1912年（明治45／大正元年）32歳、小品画の個展開催、貧乏に同情した漱石から油絵スケッチを二枚買ってもらった。5月、石川啄木没（満26歳）。10月、漱石の文展批判、朝日新聞に連載。

1913年（大正2）33歳、漱石の『鶉籠』『虞美人草』の装幀をした。以後15、16種の漱石ものの装幀をした。

6月、父死去。8月、長男安丸出生。10月、青楓図案社を設立。

文展審査に不満足な者たちが集まり、反抗運動を起こした。（文展を脱退）

1914年（大正3）34歳、文展に反抗して有島生馬、熊谷守一、石井柏亭、梅原龍三郎らと二科会結成。

自宅が二科会の事務所となった。漱石先生としばしば散歩をした。

上野博物館に良寛草書屏風を見にゆき、先生いたく感服され、

以後良寛張りと呼んで度々草書を書かれた。

（良寛の屏風をはじめて見たのは明治44年？以後、青楓は漱石

の影響で良寛に惹かれてゆく。）7月、第一次世界大戦勃発。

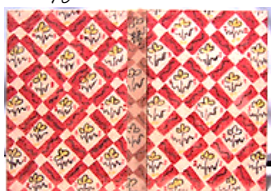
1915年（大正4）35歳、二十一カ条の要求 京都に住む。文学と絵画との制作欲さかん

であったが・・・金になる仕事のために使う時間が多かった。

漱石先生が京都に來られた。9月、次女ふよう出生。（以上、青楓『自選年譜』より）



青楓の装丁、
漱石『道草』



青楓装丁、鈴木三重吉『櫛』



青楓の装丁、漱石『明暗』



青楓、与謝野鉄幹、晶子合作「梅花」紙本水墨 32.6×125.5 cm

1916年（大正5） 36歳、7月、長男没。12月9日、漱石没（49歳10か月）

1917年（大正6） 37歳、11月、ロシア革命。河上肇『貧乏物語』刊。

1918年（大正7） 38歳、第一次世界大戦終結。スペイン風邪大流行。米騒動。

1921年（大正10） 41歳、9月、三女ひかる出生。マルクス流行。シベリア出兵。

1922年（大正11） 42歳、3月、妻敏子渡仏。秋、良寛堂竣工式に出席。

1923年（大正12） 43歳、9月1日、関東大震災。河上肇を訪ねる。京都に転居。

1924年（大正13） 44歳、『日光』同人となる。4月、妻敏子帰国。「翰墨会」設立。

1925年（大正14） 45歳、5月5日、普通選挙法公布。5月12日、治安維持法施行。

1926年（大正15） 46歳、9月、四女万里子出生。晩秋、鈴木濱子と結婚。12月、山脇敏子と離婚。

1929年（昭和4） 49歳、2月、五女礼子出生。4月、山脇敏子、あやめ姉妹を東京へ連れ去る。

京都市東山区清閑寺霊山町に津田洋画塾を開く？

河上肇の影響でプロレタリア芸術運動に加わる。

1931年（昭和6） 51歳、3月、三女ひかる死去。9月18日、満州事変。

第18回二科展に「ブルジョワ議会と民衆の生活」を出品したが警察当局の圧力で

「新議会」と改題させられた。



河上肇



青楓筆「ブルジョワ議会と民衆の生活」油画 1931年



「ブルジョワ議会と民衆の生活」制作中の青楓（左）

1932年（昭和7） 52歳、河上肇を兄の邸内に匿う。五・一五事件 9月、日本共産党に入党。上海事変。

1933年（昭和8） 53歳、1月、河上肇治安維持法違反で検挙。ヒトラー首相に就任。2月、小林多喜二獄死。

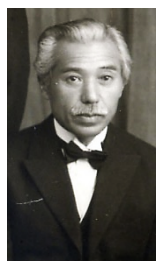
7月、小林多喜二虐殺を主題に油絵「犠牲者」を制作中、共産党への資金援助の容疑で警察に逮捕され留置されたが8月7日、起訴保留で釈放。釈放後、転向して二科会を脱退し、洋画から日本画へ転じ、文人的な日本画と良寛の研究に打ち込んだ。



青楓筆「犠牲者」油画 1933



山脇敏子、48歳頃。離婚後、画家をあきらめ、自立への道を服飾に賭け、3度渡欧し、死で勉強し、日本のオートクチュールの草分けとなった。漱石の『明暗』のお延のモデルとされる。



青楓 55歳頃
青楓の孫の話によると、当時、インド人のハンサムボーイと言われたそうである。

1934年（昭和9） 54歳、3月、大阪高島屋、12月、東京高島屋で日本画個展。
1935年（昭和10） 55歳、6月、東京で「草仮名と素描」展、9月、良寛五合庵を訪う。12月、名古屋で日本

画個展。『良寛随筆』春陽堂刊。



青楓の装丁、佐多稲子
『牡丹のある家』

1936年(昭和11) 56歳、2月、二・二六事件勃発。3月、東京高島屋で日本画個展。12月母みよ死去(83歳)
1937年(昭和12) 57歳、2月、墨人倶楽部を小川芋銭、小杉放庵、中川一政らと作る。

貞心尼の研究。

6月、大阪で第1回墨人展。『良寛父子伝』発表。

河上肇、転向して出獄。

7月、支那事変勃発。8月、第二次上海事変勃発。

11月、日独伊三国防共協定締結。大本営設置。

12月、日本軍、南京大虐殺事件。



きよふうりゅう
去風 流家元、西川一草亭(青楓の兄)「・・・花の自然を取り入れて、花の気持ちになる」

1938年(昭和13) 58歳、3月、兄一草亭死去。4月、国家総動員法公布。11月、良寛の地藏堂に滞在。

1939年(昭和14) 59歳、墓地を買い石塔を作る。9月、ドイツ軍、ポーランドに侵攻。英仏、ドイツに宣

戦。第二次世界大戦勃発。

1940年(昭和15) 60歳、12月、「邦画一如会」結成。『青楓自選歌百首』『自選年譜』自費出版。

1941年(昭和16) 61歳、対米宣戦布告。

1944年(昭和19) 64歳、茨城県小田村へ疎開。

1945年(昭和20) 65歳、8月15日、敗戦。

1946年(昭和21) 66歳、1月、河上肇死去、3月、追悼講演会。

1948年(昭和23) 68歳、東京杉並の新居に転居。

1949年(昭和24) 69歳、『漱石と十弟子』刊。

1961年(昭和36) 81歳、NHKテレビで「画業五十年」放映。

1963年(昭和38) 83歳、自伝『老画家の一生』刊。

1967年(昭和42) 87歳、体力衰え、近くの郵便局に行くのがやっとなる。

1968年(昭和43) 88歳、4月、夫妻で志賀直哉訪問。

1971年(昭和46) 91歳、7月、小池唯則、友人の紹介で青楓の画室を訪ねる。

1972年(昭和47) 92歳、小池唯則より美術館新設の話をきき、40点を寄贈。

新潟長岡百貨店で「良寛詩歌書青楓展」

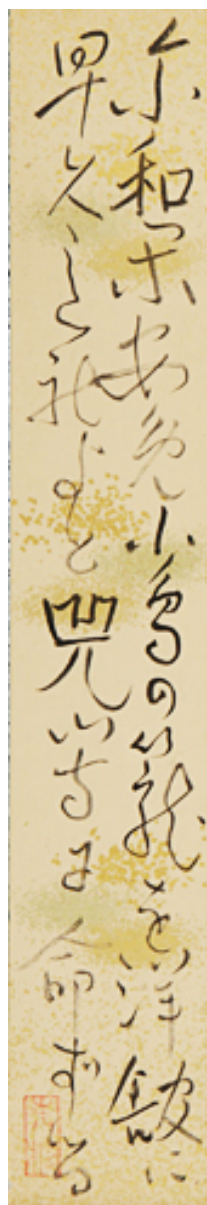
1973年(昭和48) 93歳、7月、「良寛の書と歌」朝日新聞連載。12月、『春秋九五年』刊。

1974年(昭和49) 94歳、10月23日、甲州一宮町に「青楓美術館」開館。

1978年(昭和53) 98歳、8月31日、床の中で大往生(老衰)。

1979年(昭和54) 濱子夫人死去。

にわかあめ小鳥の籠を洋館に早くいれよと児守に命ずる 青楓

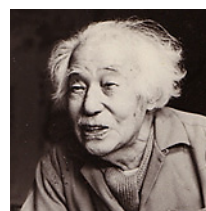


青楓書「短冊」

手ずさびにわれもかうなどもてあそぶ人も混れり山荘の客 晶子



青楓画「歌与謝野晶子」
109×27 cm
青楓美術館蔵



青楓、90歳代？



小池唯則像



青楓と濱子夫人



青楓、70歳代？



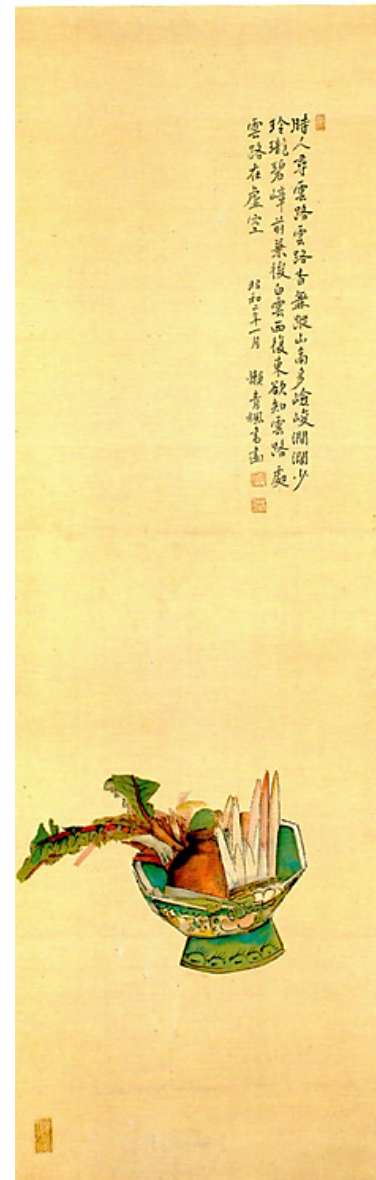
青楓作「漱石先生像」1974年（昭和49）
94歳 47.3×32.3 cm 青楓美術館蔵
画賛に大正5年9月漱石作七律を記している。

閑窓睡覺影参差 机上猶余
一枝筆 多病壳文秋入骨 細心構
想寒砭肌 紅塵堆裏聖賢道
昭和四十九年甲寅初夏
漱石先生像 九十五壽 老聲龜人拝寫

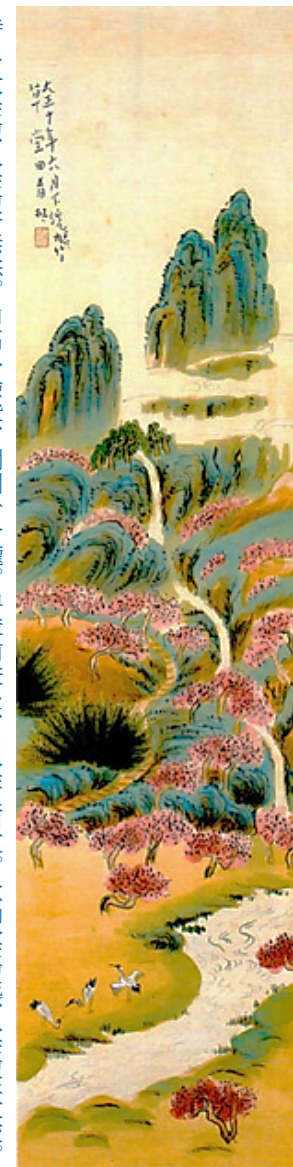


青楓作「漱石と十弟子」(上)「漱石山房と其弟子達」(下)

「……私は先生にいろいろお世話になったので何となく生みの親爺のやうな気がしてゐた。先生の臨終の枕元でお弟子たちが順々に筆に水をつけて口びるを濡らしてゐた。私の番になった時声をあげて泣いてしまった。泣けて泣けて仕方がなかった。親に別れる以上に悲しかった。……」
(青楓『春秋九十五年』「人間漱石」より)

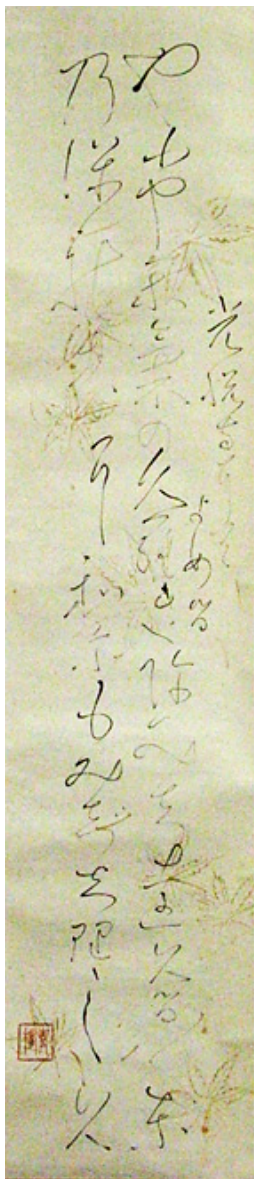


青楓筆「静物」1927年（昭和2）47歳
100.0×31.8 cm 青楓美術館蔵



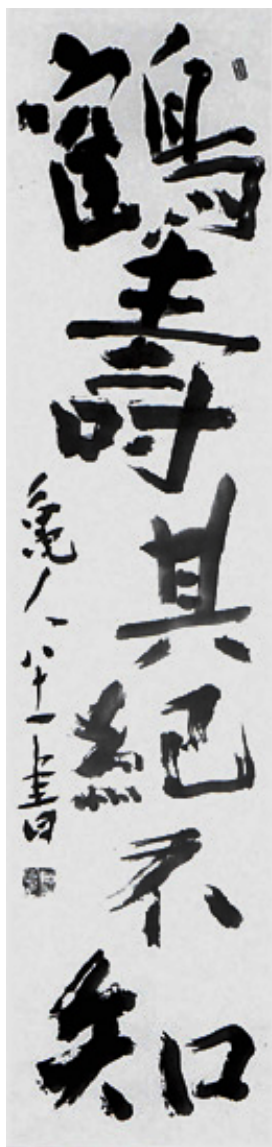
青楓筆「山水(桃源郷)」
1921年（大正10）41歳
126.0×32.8 cm 青楓美術館蔵

時人尋雲路、雲路杳無踪。山高多險峻、澗闊少玲瓏。碧嶂前兼後、白雲復西東。欲知雲路處、雲路在虛空。
昭和二年一月 懶青楓書画 寒山の詩が書かれている。「懶」は、ものぐさ、無精、という意味。

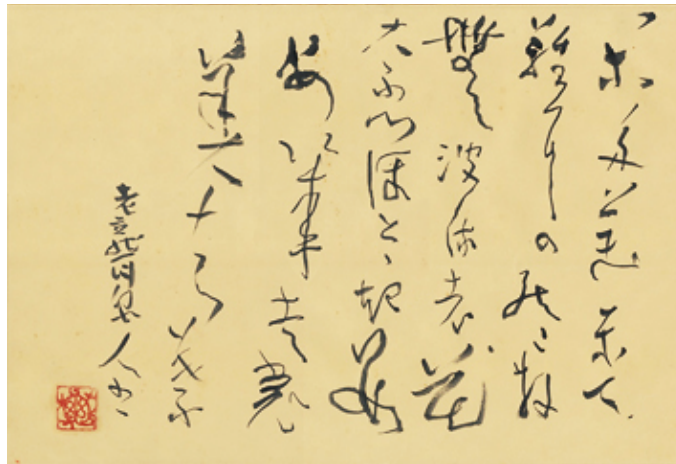


青楓筆「光悦寺にてよめる」
和歌 紙本 24.1×110.3 cm

「光悦寺にてよめる やぶかけ（夕影）の くらしそみちを くるくると のぼればにわに
もみちりしく」 本紙の背景の楓の葉も青楓が描いたもの。



青楓筆「鶴寿其紀不知」
1960年（昭和35）80歳
135×33 cm 青楓美術館蔵



青楓書「良寛の歌」1977年（昭和52）97歳 36.8×53.5 cm 個人蔵

閑多美東天
難耳可能可散
無 波流者花
奈川ほとゝ起数
安幾者 裳
美知葉
老聲亀人書
かたみとて
なにかのこさ
む はるは花
なつほとゝぎす
あきは も
みち葉
老聲亀人書

「平安朝の仮名には流麗暢達とも言へる美しい文字は沢山ありますが、然しそれらの美しい字にひかれる心と良寛の仮名にひかれる心とは又自ら別のものの、やうです。．．．平安朝の仮名には．．．個人的な特殊性若しくはそれぞれの筆者の生活内容が書と結びついて我々の頭の中に浮き上つてこないところに不満があり、もの足りなさがあるのです。．．．良寛の書には彼の生活がにじみ出てゐます。ものごとを感じ易く、しかも純真な美しいころを押し通すことが出来ず、世俗をさけて月花を友として侘しい生活をしてゐるものゝ、人の世の人情を理解しないただの遁世者ではなかった。．．．浮世の何も彼も知りぬいた人間だった。．．．良寛の書には人間性の弱さと、純情と、人を思う温かさ、世をはかなむ寂しさと、あらゆる人の美点弱点を反映させた彼の生活がにじみ出てゐます。その上彼は線と形とに対する芸術的感覚によつてそれらの諸条件を統一することを知つてゐました。．．．良寛には三つの嫌ひなものがあつた。書家の書、歌人の歌（若しくは詩）、料理人の料理。夏目先生もよく良寛のやうに専門家（くろうと）のものは好まれない。先生は実際誰々を師とすると云ふやうなことはなかつた。従つて型や法則から学ばれたのではありません。専門の小説は言ふに及ばず、書でも画でも俳句でも詩でも本質的なものを直接に掴んでゐた。．．．あらゆる芸術が創造的であればならぬと云ふ見地に立てば、型や法則に囚はれないものゝ萌芽はたとへ未熟なところや欠陥が多少あつても、無下にしりぞけらる可きではないのです。．．．良寛は法則に拘泥した字が嫌ひであつて、法則を生み出す程の本質的なものは好きだつたのです。だから仮名は道風を学び、草書は懷素や羲之を研究し、歌は万葉、詩は寒山詩と云ふ風に人間性の偽らざる反映が、書なり歌なり詩なりに直接出てゐるものはよく学び、自分の榮養として摂取することを努められたのです。．．．」（津田青楓『良寛随筆』より）



青楓筆「良寛和尚の像」1974年（昭和49）頃 94歳 46.5×66.4 cm
画賛に良寛の詩と歌が書かれている。青楓美術館蔵

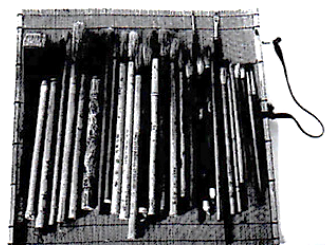
画賛
生涯（懶）立身懶騰々
任天真囊中三升
米炉邊一束薪
唯（誰）問迷悟跡何知
名利塵夜雨草
庵裡雙脚等
間伸
良寛和尚
像并詩歌
龜青楓
わびぬれど
わがいは
ほなれ
ばかへ
るなり
こころや
すきを
おもひでと（に）
して



「津田青楓像」1974年（昭和49）94歳
ブロンズ
本郷新作 本郷新記念札幌彫刻美術館
蔵 青楓美術館にもある。



青楓書「風」1974年（昭和49）94歳 29.5×46.3 cm
青楓美術館蔵 「風 九十五壽 青楓」



青楓愛用の筆

「字といふものは・・・筆で書くものでなくして心で書くものだ・・・リズムカルに字を書くといふことは特別な技巧を必要とする・・・そこに訓練とか練習とかいふことが必要になってくる・・・私は習ふといふことを重要視する・・・」（青楓『春秋九十五年』「書画随筆」より）

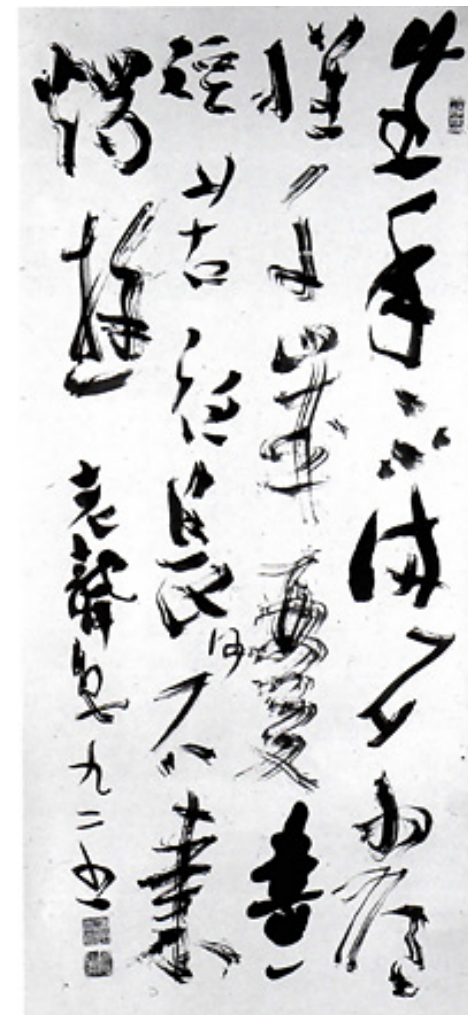
「・・・私は前にもいったことがあるが、筆が字を書いてくれるもののやうに思つて、筆屋へ注文していろいろの筆を作らせて試筆してみたことがあつたが、それは人間が筆に使はれるやうなもので、きまりきつた字しかできない。さうでなくて人間が、自由自在に筆を使ひこなして自分の字を書いてみたいと思つてゐる・・・筆も使ひやうで自分のすきな字が書けるのではないかと思ふ。

私の筆巻きには長短いろいろあり、また画筆もまじへてかれこれ五十本近くある。しかし字を書く時に取りあげるのは二三本しかない・・・中位の長い穂の筆一本あれば私はこと足りる。細楷も中大も全紙に大字を書く時も、長穂一本でこと足りる。自慢ぢやないが、真に弘法筆を選ばずの観である。」（青楓『春秋九十五年』「書について三題」・弘法筆を選ばず・より）

「津田君の画には技巧がないと共に、人の意を迎へたり、世に媚びたりする態度がどこにも見えません。一直線に自分の芸術的良心に命令された通り動いて行く丈です・・・彼の偽はらざる天真の発現が伴つてゐるのです。」（漱石『美術新報』大正4年10月）



青楓筆「諸悪莫作、衆善奉行」1974年（昭和49）94歳 132×30 cm
青楓美術館蔵



青楓書「五言古詩」1971年（昭和46）91歳 136.0×61.5 cm 漢代の詩 部分

生年不滿百 常 生年 不 滿 百
懷千載憂 昼 常 懷 千載 憂
短苦夜長 何不 秉 昼短 苦 夜長
燭遊 老聲 龜九二書 何 不 秉 燭 遊



青楓筆「河上肇像」1973年、93歳
32.8×48.3cm 青楓美術館蔵

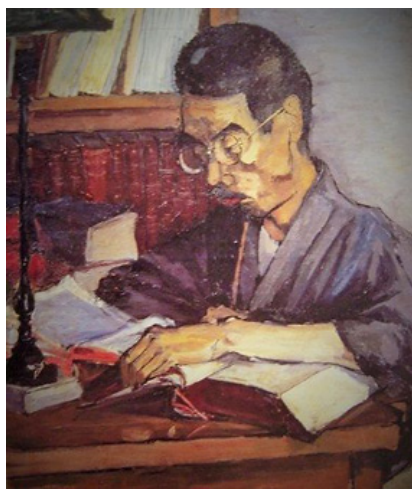
賛・(泛海)

險夷原不滞胸中 何異浮雲過
太空 夜静海濤三萬里 月明
飛錫下天風 王陽明
大学于研究室 河上肇像

險夷(けんい)原(もと)不
滞 胸中 何異 浮雲 過
太空(たいくう) 夜 静 海
濤(かいとう) 三萬里 月明
(げつめい) 飛 錫(しゃく)
下 天風 王陽明



山梨県笛吹市立青楓美術館
葡萄畑の真中にある。



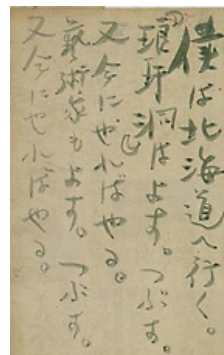
青楓画「研究室に於ける河上肇像」1926年
(大正15) 46歳 油絵 京都国立近代美術館蔵

河上肇には少年時代から書画の才能があった。東大在学中に、内村鑑三らからキリスト教の絶対的非利己主義という精神の洗礼を受けた。資本主義社会の矛盾の解決を絶対的利他主義に求め、1905年、教職を辞め、伊藤証信の「無我苑」に入るが、60日ほどで脱退。読売新聞の記者となる。1906年、読売新聞に『人生の帰趣』、千山万水楼の名で『社会主義評論』を連載。1907年、新聞社を辞める。1908年、京都帝大講師となる。1909年(明治42)京都帝大助教授となる。1913年、欧州へ留学。1914年、法学博士になる。1915年初春帰国。京都帝大教授となる。1916年(大正5)大阪朝日新聞に『貧乏物語』連載。大学教授時代の1924年(大正13)に津田青楓を囲んで書画を楽しむ会(「翰墨会」)に和辻哲郎らと参加したが、長くは続けられなかった。1928年(昭和3)4月、筆禍事件で京都帝大を退職、その後は政治運動に入る。1932年9月9日日本共産党員となって地下活動に入ったが、1933年(昭和8)、治安維持法違反で逮捕され入獄、7月7日、「獄中独語」(転向宣言)が新聞紙上に発表された。足掛け5年の獄中で彼は、多くの書を残している。1937年(昭和12)出獄。出獄後は閑居閑人と称して隠棲し、『自叙伝』などの執筆や詩人として過ごした。1946年1月30日、栄養失調と肺炎のため没(66歳)。

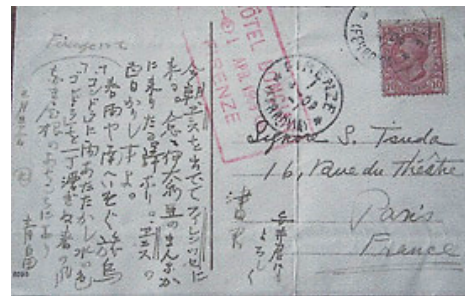
河上肇(1879年・明治12年～1946年・昭和21年)

マルクス主義経済学者。日本にマルクス主義を紹介した経済学者。宗教的体験者。

僕は北海道へ行く。
『琅玕洞』はよす。つぶす。
又今にやればやる。
芸術家もよす。つぶす。
又今にやればやる。



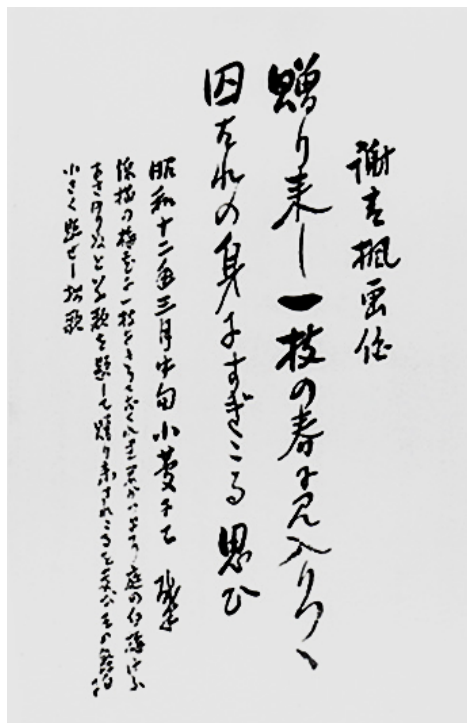
青楓宛高村光太郎の葉書
1911年(明治44)



青楓宛高村光太郎の絵葉書 1909年(明治42)

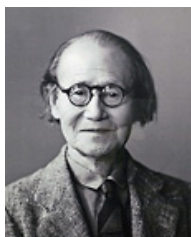
フィレンツェからパリの青楓へ。
今朝ゼニスを出てフィレンツェに
来る。愈々伊太利亜のまんなか
に來り足る訳なり。ゼニスの
面白かりし事よ。
春雨や南へいそぐ旅鳥
「ゴンドラ」に雨あたたかし水の色
「ゴンドラ」を一丁漕ぎぬめ春の風
赤き屋根のあちこちにあり青島
三月三十一日 光 安井君にもよろしく

「・・・河上さんが最初に私に深い感銘を与へられた文章の『人生の帰趣』・・・漱石山房に出入して先生の恩顧に浴した当時の数年ではあったが、その間も雑誌『無我愛』を通じて河上さんの動静を知ることを楽しみとし、かつ文章に現はれたものも機会さへあれば読むことに努めてゐた。しかし何といったものも私は毎週木曜ごとにお目にかかれる漱石先生を対象とし、芸術を通じて先生から吸収されるもの・・・は吸収し享受し、よき影響を自然と受けることを何よりの喜びとしてゐたから、河上さんに対して直接ぶつかつてみようといふ気は別に起らなかつた。それが偶然の結果として、漱石先生の没後京都において河上さんの知遇を得るめぐりあはせになった・・・大正六年に刊行された『貧乏物語』を読んだ初めて河上さんの意図されてゐる経済学とはこのやうなものとといふことを知った。それから・・・、所謂マルクス主義の書物をも読むことになった。・・・河上さんの書は中国の王陽明といふ人のまねをして居られたが、字は骨つぽくてふくらみがなかつた。・・・人から学ぶときは自分をなくしようといふのが河上さんの口癖だった。・・・」(青楓「春秋九十五年」「忘れ得ぬ人々」河上肇より)



河上肇書「謝青楓画伯」1937年 248×190cm

贈り来し一枝の春に見入りつゝ囚はれの身にすぎたる思ひ 昭和十二年三月中旬小菅にて 肇 線描の梅花に一枝をきりておくれり君がつまに庭の白梅今日まさかりぬといふ歌を題して贈り来されたるを喜びその余白に小さく題せし拙歌



清水比庵

1883年(明治16年) 2月8日〜1975年(昭和50) 10月24日(92歳没)

歌人、書家、画家、政治家。本名は清水秀。比庵は号、その他、比舟・比安・比舟など。

晩年は、「いま良寛」と呼ばれた。比庵三芸と言われる歌・書・画は独学。一流の文筆家で随筆

『紅をもて』『水清き』『山高し』などがある。良寛を尊敬していた。

『紅をもて』『水清き』『山高し』などがある。良寛を尊敬していた。

『紅をもて』『水清き』『山高し』などがある。良寛を尊敬していた。

『紅をもて』『水清き』『山高し』などがある。良寛を尊敬していた。

『紅をもて』『水清き』『山高し』などがある。良寛を尊敬していた。

『紅をもて』『水清き』『山高し』などがある。良寛を尊敬していた。

1883年(明治16) 岡山県高梁市に備中松山藩の士族清水質・スエの長男?として生まれる。身体が弱かった。

1894年(明治27) 11歳、7月25日、日清戦争勃発。弱虫で泣虫であった。父や書の先生から悪筆と言われた。

1897年(明治30) 14歳、父死去(45歳)。遠縁の福西家の書生となり住み込み、働きながら通学。

1904年(明治37) 21歳、2月8日、日露戦争勃発。正岡子規に傾倒。

大学在学中に肋膜炎を患い九死に一生を得る。

1907年(明治40) 25歳、京都帝国大学法学部を卒業し司法官となる。

いとこの笹田鶴代と結婚し神戸市奥平野に住む。

キリスト教の洗礼を受ける。

1908年(明治41) 26歳、4月、長女明子生まれる。

1909年(明治42) 27歳、判事に任官、法曹界には向かず、すぐ退官して、

安田銀行に勤め東京に住むが、実業界も不向。

1910年(明治43) 28歳、6月、大逆事件。8月、日韓併合。

1912年(明治45/大正元年) 29歳、6月、次女開子生まれる。啄木没。

1913年(大正2) 30歳、5月、開子死去。(11カ月)

生活苦しく夜間中学の講師をする。

1914年(大正3) 31歳、3月、秋田県横手の支店長になって転勤。

スケッチをよくした。

7月28日、第一次世界大戦勃発。

1916年(大正5) 33歳、9月、青森支店に転勤。

12月、漱石没

自筆絵葉書を頻繁に描く。

1917年(大正6) 34歳、9月、新制古河銀行へ、

東京に住む。

11月、ロシア革命

1918年(大正7) 35歳、古河銀行大阪船場支店長になり、米騒動。

神戸市灘区魚崎町に住む。スペイン風邪流行。

洋画家松原三五郎の塾で人体デッサンを習う。(約半年間)

同塾出身の小出檜重に深く傾倒する。

11月11日、第一次世界大戦終結。

(死者1900万人に及んだ)

日本人は48万人死亡。ヴェルサイユ条約。

1923年(大正12) 40歳、9月1日、関東大震災。

岡山県笠岡市の妹章子の家に寄寓。

1924年(大正13) 41歳、古河電機工業に移り横浜に住む。

1925年(大正14) 42歳、母、逗子の弟の家で亡くなる。(62歳)



比庵と鶴代と明子
1920年(大正9)頃
魚崎時代



比庵筆「絵手紙」大正3年5月
子連れで ゆく道すがら草繁
り 小さき花の草ごとに咲く
比庵は「絵手紙の元祖」とし
ても知られている。



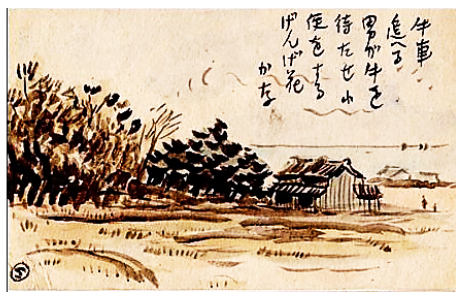
比庵
横手支店長時代



比庵と明子と鶴代 大正3年



比庵 京大時代



比庵筆「絵手紙」大正9年4月
牛車追へる男が 牛を待たせ 小便を
する げんげ花かな

1928年（昭和3）45歳、栃木県日光町の古河電工日光精銅所に、会計課長として単身赴任。7月、第一歌集

1929年（昭和4）46歳、5月、合同歌集『赤薔』発行。世界恐慌。10月、短歌誌『二荒』を主宰し、発行。

11月、古河電機工業を退職し横浜に住む。志賀尚を婿養子として迎え娘明子と結婚。

1930年（昭和5）47歳、3月、初孫誕生。昭和恐慌。7月、日光町長に就任。山内唯心院に独居。

風流町長と呼ばれる。

1931年（昭和6）48歳、9月18日、満州事変起こる

1932年（昭和7）49歳、小杉放菴らと知り合う。第一次上海事変。

1933年（昭和8）50歳、歌集『朝明』を発行

1935年（昭和10）52歳、6月、「慈悲心鳥を聞く会」を主宰

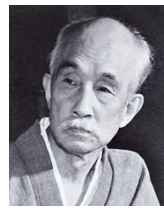
号を「比庵」に改名。（昭和12年）第二次上海事変。

1939年（昭和14）56歳、5月、部下の不祥事の責任を取って町長を辞任。

9月1日、第二次世界大戦勃発（死者8500万人）
10月、千葉県市川市に移住。

「家族を食べさせる為の生活は今までで終わった。明日からは自分の生活をしようと思う。これでひとつの区切りがついてよかったよ・・・十年思う存分描かせてもらった、死んでもいいと思っている。これからお母さんよろしくたのむぞ」と宣言した。

『二荒』は『下野短歌』と合併し『下野短歌』となる。



1941年（昭和16）58歳、
12月8日、太平洋戦争（大東亜戦争）勃発。

1942年（昭和17）59歳、11月23日、妻死去。12月、川合玉堂の賛助を得て

弟清水三溪（浩）と「野水会」を創設。

第1回展東京銀座紀伊国屋書展画廊で開催。

のち妹の章子も参加。

1943年（昭和18）60歳、第2回「野水会」展を三越本店で開催。

以後、第15回展まで毎年開催したが、

1957年（昭和32）、川合玉堂追悼展をもって終結した。

わが妻はうつかりき死顔のかくうつくしくしてあるをわれは見ず 比庵

身のまはりひとりみずからすること
死にたる妻をおもふことなり 比庵

1944年(昭和19) 61歳、岡山県笠岡町に疎開。昭和22年頃まで笠岡高女で毎週水曜日の放課後に作歌の指導。

1945年(昭和20) 62歳、3月、6月沖縄戦(約19万人死亡)、3月、東京大空襲(10万人以上死亡)。単独の

空襲による犠牲者数は世界史上最大）名古屋、大阪、神戸でも空襲。4月、ヒトラ

―自殺。5月、ドイツ降伏。5月～7月、日本全国的に空襲多発。6月、国際連合

発足。7月16日、米国のマンハッタン計画成功（原子爆弾実験成功）。7月26日、

ポツダム宣言。8月6日、広島に原爆投下される。（10万人以上死亡）8月8日、

ソ連が日本へ宣戦布告。8月9日、長崎に原子爆弾投下される。(約7万4千人死)

亡 8月9日、ソ連が対日参戦し日本を攻撃。8月10日、御前会議でポツダム宣言

受諾を決定。8月14日、連合国へポツダム宣言受諾の旨を伝える。8月15日、玉

音放送。日本敗戦する。8月16日、ソ連、南樺太に侵攻。8月28日、ソ連、択捉

島を占領。9月1日、ソ連、国後島、歯舞群島を占領。9月2日、日本、降伏文書

に調印（大東亜戦争終結） 9月5日、ソ連、色丹島を占領

東京の娘（明子）夫婦の家に移る。

10月1日、中華人民共和國建国。

朝鮮戦争勃発（6月25日～1953年7月27日）

1953年（昭和28）70歳、9月、郷里で初めての書画展を開く。これ以後、

岡山・東京を中心に日本各地で展覧会を開催。



1955年（昭和30）72歳、比庵自筆歌集『窗日』刊行。

1958年（昭和33）75歳、1月、自筆歌集『窗日 第二』刊行。

11月、日光市名誉市民に推挙される。

1959年（昭和34）76歳、日光市に最初の歌碑が建立される。

このころから笠岡、岡山などで毎年個展開催、各地に比庵会発足。

1962年（昭和37）79歳、1月、一楽書藝院（桑田笹舟主宰）

より書画集『比庵』刊行。

11月、清水三溪と「有山会」創立。秋小林和作、

上田桑鳩と尾道市西国寺本堂の襖に合作。



比庵

1964年（昭和39）81歳、トンキン湾事件。（ベトナム戦争〜75年）

1966年（昭和41）83歳、1月、宮中歌会始の儀に召人を拝命。

11月、東京学芸大学での全国大学書道学会で、「書の歩み」と題して講演する。

「文学博士とか芸術院会員とかいうような立派な肩書きがあるといいますが、何もない。それで結局歌よみということにしてみました。」

「私は歌のあるグループにおりますが、そのグループの人達に、人間は社会に奉仕しなければいかん。奉仕のできるような人間でなければいかんと主張している。その奉仕の一つとして顔の奉仕がある。

人間はよい顔をしておれば、それが社会への奉仕になるという主張なのです。よい顔をしておる人が集まると、自然平和にもなる。

それから和やかにもなる。

それからまあ文化の発展をする。

人間はそれで顔が良くなければ仕事も良くいかん。例えば書道で言いますが、顔のいい人でないと、書がうまくないと、こういう結論になります。」

「私の書は、書を立派に書こうというよりも、

歌を立派に書こうという書なんです。

歌を立派に書こうというための書なんですから、

いわば書家の書でなしに、歌よみの書です。」

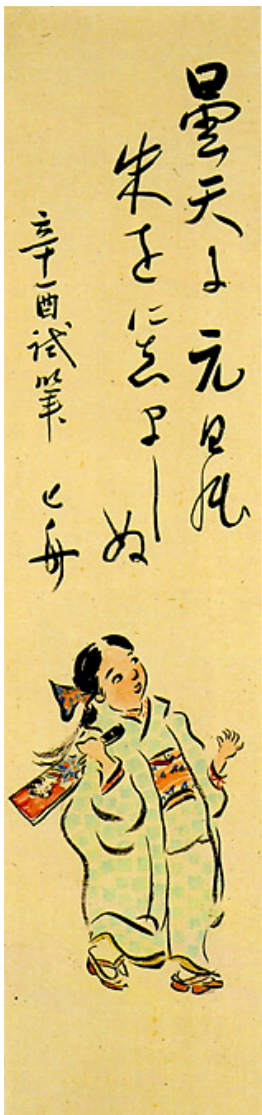
（清水比庵講演録「書の歩み」、から抜粋。全国書道学会、東京学芸大学、昭和41年）

1969年（昭和44）86歳、4月、『週刊朝日』に、

「いま良寛、清水比庵八十六歳の青春」の記事が載り、これより「いま良寛」と呼ばれる。

1974年（昭和50）92歳、10月24日、死去（満92歳と8ヶ月）

曇天に 元旦の朱をにじましぬ 辛酉試筆 七舟



比庵「追ひ羽根」
大正10年（1921年）38歳
紙本着色 128.5×30.0 cm
個人蔵



比庵筆 日光東照宮発行『大日光』表紙絵 昭和42年85歳



制作中の比庵 昭和45年87歳



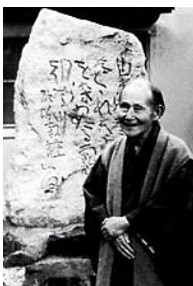
比庵 83歳
東京学芸大学で講演



比庵書、尾道市の西國寺の襖の自歌作品 79歳
朝あけし吉備の海路を秋風にこぎゆく舟のゆきあへる見ゆ 昭和三十七年秋 比庵



比庵 76歳



比庵 91歳



比庵筆「老松」1962年（昭和37）79歳

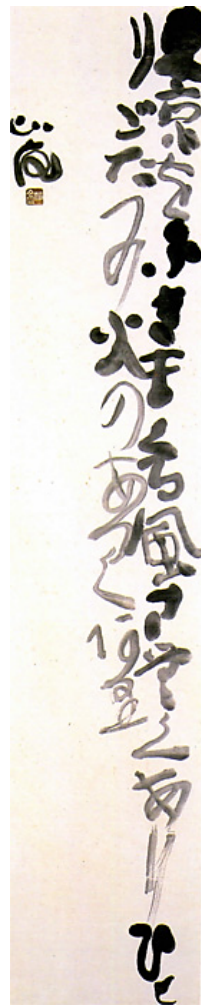
ふるさとの 一つ老松 誰
をまつ 年々に来て われ
は見にけり 八十比庵



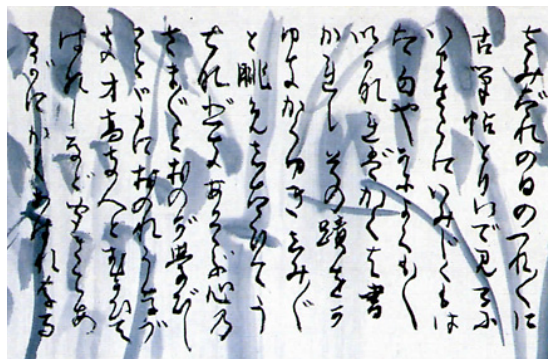
比庵筆「東京」「屋根」昭和32年（1957）74歳
紙本・墨 屏風 各140.0×28.2cm 個人蔵
東京をふきまくる風さむくありひとりごた
つの火のあつくあり 比庵

屋根のうへにふたつとまれるわが雀むきを
ちがへてちかくまらべり 七十五叟 比庵

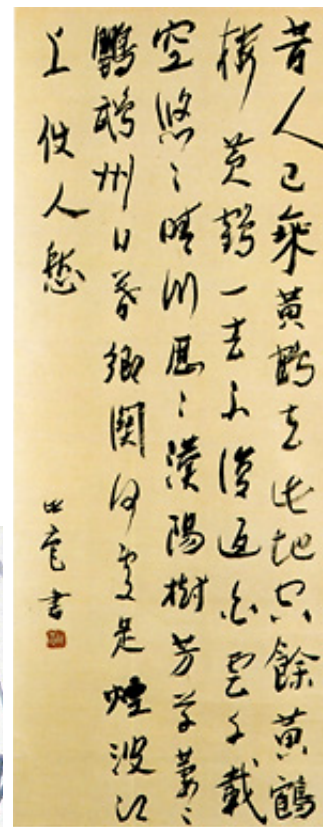
この頃から書風と画風が一変している。



比庵筆「さみだれ」昭和20年代（60歳代）紙本着色
34×39cm ワコースポーツ・文化振興財団蔵



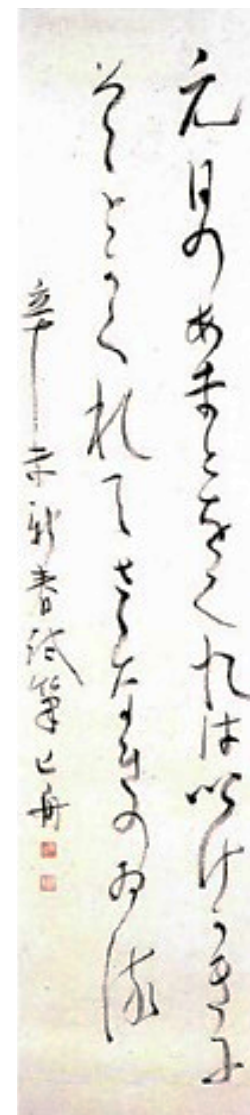
さみだれの日のつれづれに
古筆帖とりいで見るに
いまさらにいみじくもは
た句やかによくもよくも
いかなればかくは書
かれしその蹟をか
ゆきかくゆきしみじみ
と眺めたひてう
ちなびきあそぶ心の
さまざまとおのが学びし
ことどもにおのれうなづ
き才高き人とむかひて
はなしなど聞きてあ
るがにかくあはれる



比庵書「黄鶴楼」
昭和10年代（50歳代）
紙本・墨 136.2×54.2cm
高梁市文化交流館蔵

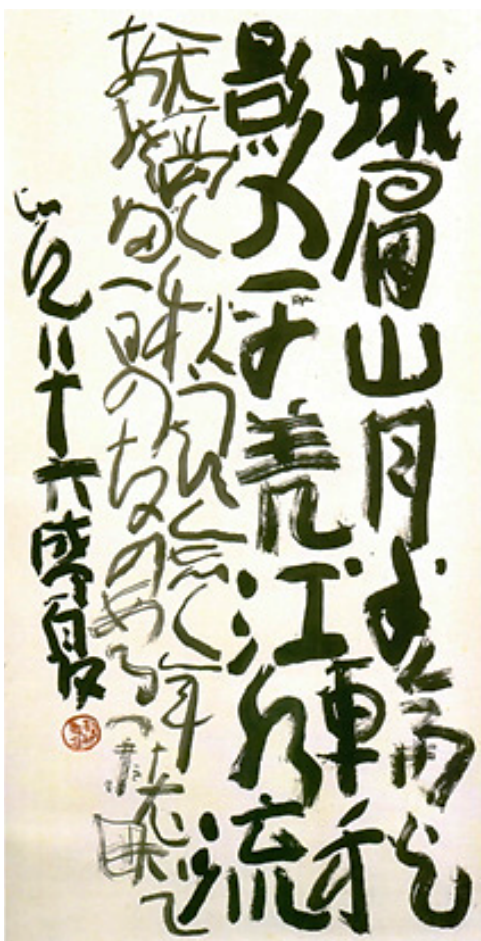
「黄鶴楼」は、中国の武漢市にある楼閣。李白の詩で知られる名所である。この詩は唐代の崔顥の「黄鶴楼」。

右の歌の「笙鳴き」は冬のウグイスの鳴き声のこと。



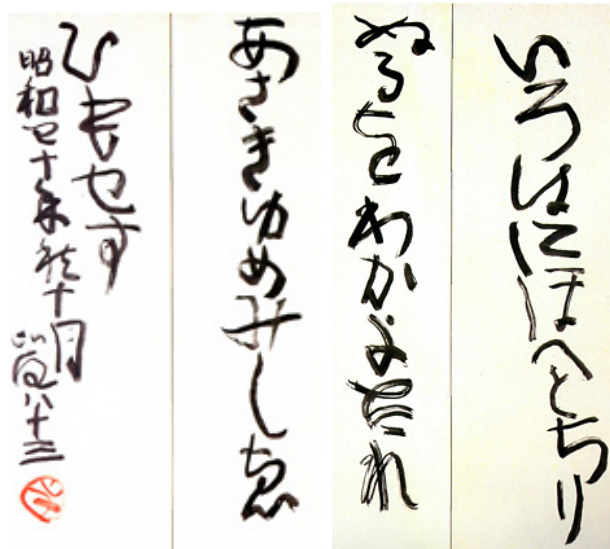
比庵「元日」
昭和6年（1931）48歳
紙本・墨 137.0×34.0cm
笠岡市立竹喬美術館蔵

元日のあまごをくればいけがきにそそとかくれてささなきのある 辛未新春試筆 七舟



比庵書「蛾眉山月」1968年（昭和43）
85歳紙本・墨 135.0×69.5cm 個人蔵

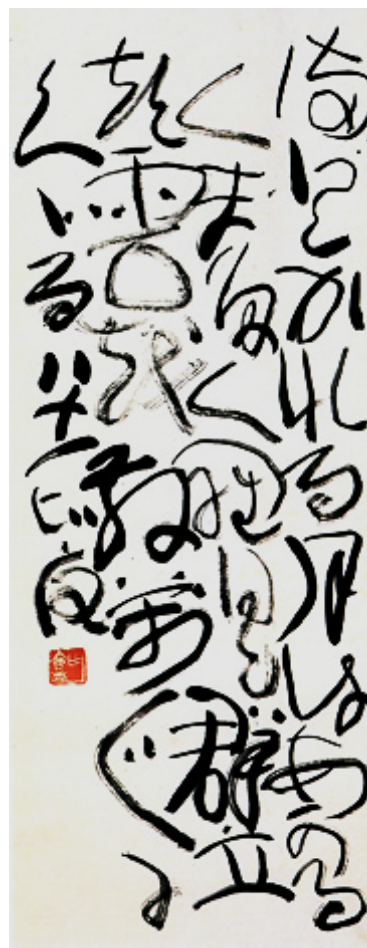
蛾眉山月半輪秋 影入平羌江水流（李白「蛾眉山月歌」より）
天高く秋うつくしく年老いてあそぶ
一日の友のあるかも
比庵八十六 盛夏



比庵書「いろはうた」部分 1965年（昭和40）82歳 紙本
六曲一隻 132.5×262.0cm 個人蔵

「歌は中学時代『古今和歌集』の注釈本を耽読することから始まり、与謝野晶子の歌に感化され、その後、子規の影響を受け『万葉集』に傾倒し、子規の写生論を学んだ。書は巖谷一六、貫名海屋らに傾倒。中学校の漢文の先生から筆法を学んだ。かなは『秋萩帖』など古筆を幅広く学んだ。」（昭和30年に大本琢壽に書き送った芸術経歴から）

「・・・キリストの『心の貧しきものは幸ひなり』といふ言葉に小生は感動して、之がわが歌だと思ったのである。心の貧しきもの、悲しみがわかつてゐるものは、結局悲しいものでなく幸福なものなのである。この意味の幸福な立場から小生はものを見て歌を作る・・・歌を作るにいつも幸福感から入って行くやうに、人生も常に幸福な方面に心を向けるやうに心掛けてをる・・・心の貧しさを基調として、作品をかくことを一生けんめいに勉強した・・・作歌精神は以上の如く心の貧しきものは幸ひなりといふ、キリストの教へ、また幸福道の歩みに従って行きたい・・・」（昭和49年10月、91歳）



比庵筆「まどかなる月」1963年（昭和38）80歳 紙本・墨 86.8×34.6cm
ワコースポーツ・文化振興財団蔵
まどかなる月はあかるくまたくらく群立つ雲をつぎつぎにくぐる 八十一比庵

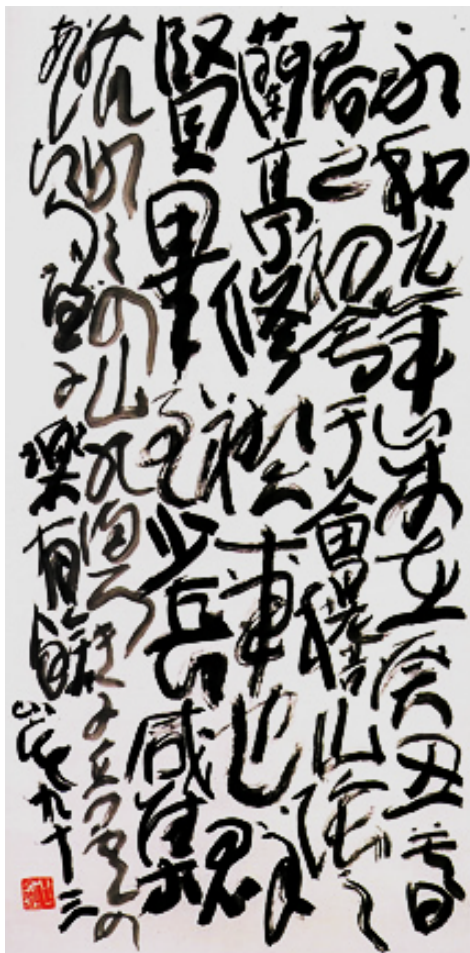
筆の先を切った^{とくひつ}禿筆で書いた、ばさついた肥瘦のない書体。



比庵筆「老松」1962年（昭和37）79歳 紙本着彩
146×78cm 広島県立美術館蔵

ひさかたの天の太空くれなるに わが八十の朝ぼらけなり 昭和三十七年試筆 比庵

この頃から歌書画一体となり、独自のスタイルを確立する。

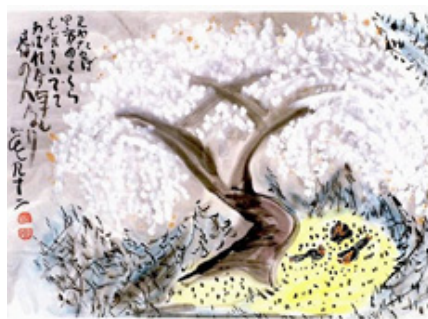


比庵書「蘭亭序」1975m年（昭和50）92歳
紙本・墨 135.5×67.5cm 岡山県立美術館蔵

永和九年歲在癸丑暮春之初 會于會稽山陰之蘭亭修禊事也 群賢畢至少長咸集
みんなみの山のまろきに立つ雲のあした
たのしみでありある
夕べに 楽 有 餘 比庵九十三



比庵筆「豊旗雲」1972年（昭和47）89歳
紙本・墨・着色 68.6×69.6cm 個人蔵
天地に神いまさずばくれなるの豊旗雲をいかにたたへむ 比庵九十



比庵筆「桜」1974年（昭和49）91歳
見わたせば四方のさくらも咲きいでて
あはれ今年も春の人なり 比庵九十二



比庵書「毎日佳境」1970年（昭和45）87歳
これが小生の標語である。



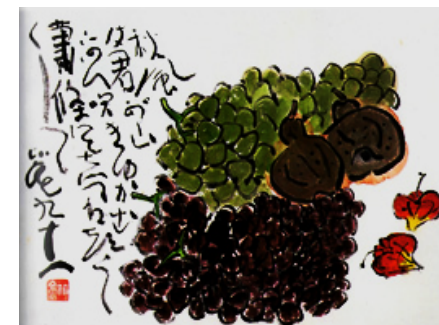
比庵筆「富士」1974年（昭和49）91歳
紙本着色 35.2×53.1cm 個人蔵
雲をもて線描きたる富士の山聳えて
蒼く空晴れわたる 比庵九十二



比庵筆「富士山」1975年（昭和50）92歳 紙本着色 42.2×63.5cm 高梁市文化交流館蔵
富士の山見ゆるところにをる人はあした
夕べにたのしかるべし 比庵九十三



比庵筆「蔬菜」1970年（昭和45）87歳 紙本着色 35×48cm 笠岡市立竹喬美術館蔵
たらちねの母がつくりしたべものを老いても
いまもわれは好むも 比庵八十八



比庵筆「秋果」1973年（昭和48）90歳 紙本着色 34×50cm 個人蔵
秋風は君が山河へ吹きゆかむ蕭條と
してうつくしくして 比庵九十一

「小生はいつも歌を基本とし、書と画は文人（歌人）の書、文人の画を心掛けてをる。画家には南画はかけても文人画はかけない。……書家には書はかけても文人書はかけない。之はどうしても歌をやらないければならない。……小生は自然に歌と画と書とを習得して、そのままが一体となつて作品に現はれて、之が小生の作品の特色のやうになつてをる。……小生の歌、書、画は日本の国民性の上に立つて、国民にわかり、国民に楽しんで、国民にわがやうな歌であり、画であり、書である。国民にわかるやうな芸術、之が至上の芸術の建前であるとは云はないけれど、之は所謂芸術家と自称してゐる人たちの唱へる、理窟入りの芸術に比べれば、その純度に於いて比較にならぬものと思つてゐる。……之は自然に其処へ到り着いたもので、云はば之は小生の人柄から、又は八十八年長生きをしてゐるところから自然に到り着いた小生の芸術境とも、老人境ともいふべきものであらう。……『野水帖 清水 比庵 歌・書・画』清水三溪昭和45年より」



日光東照宮 三猿



日光東照宮 眠り猫



日光東照宮 孔雀



「魔除けの逆柱」

陽明門の 12 本の柱の中の一つだけが逆文様になっている。猿の顔のような渦巻き文様（「グリ紋」と呼ばれる）が彫られている。



日光東照宮陽明門（国宝）

日光東照宮は徳川家康の霊廟。1616 年、家康の死の年造営された。



日光東照宮 唐門（国宝）



日光東照宮 唐門（部分拡大）

白と黒を基調としている。中国の聖人賢者などの彫刻がほどこされている。



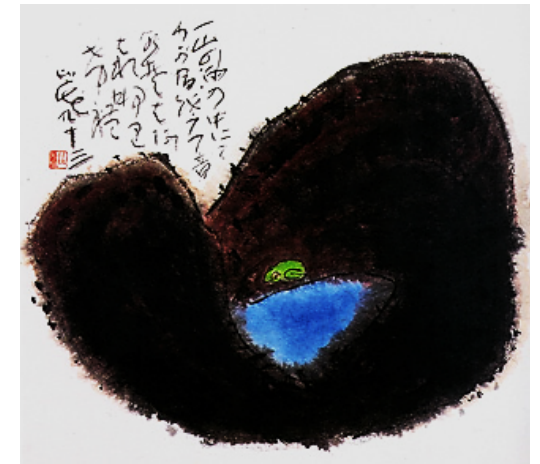
日光東照宮 五重塔

ドイツの建築家ブルーノ・タウトは 1933 年に日本に招待され、各地を見学した結果、東照宮と桂離宮に日本文化の両極をみた。「日光のこの上もない高価な漆塗りで床まで塗られたところの大規模な杜寺や、無数の彫像の如きものは、世界中に到る所にあるわけです。日光の如きは、世界中に到る所にあるわけに比すれば物の数でもなく、ゆえに、それだけのためにわざわざ日本へ来ることは無駄なことである。これに反し、桂離宮はまったくその選を異にする。これは世界に二つなきものである。それは純粋の日本であり、しかも、かかる純粋の日本が日光と同時代に造られたということからしても、驚嘆に値するのである。」（タウト『ニッポン』講談社学術文庫より）

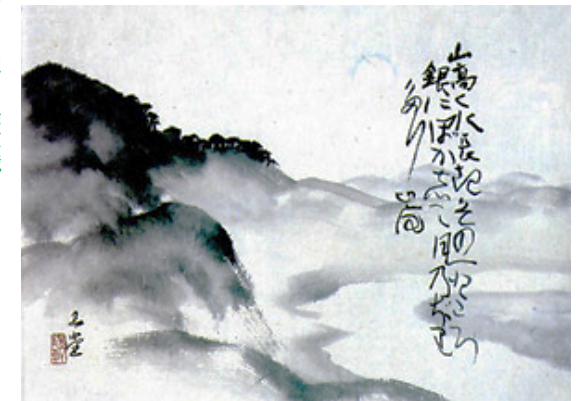
『桂離宮は、パルテノンとともに人類の光栄である！』他方、東照宮はと言えば、いわば銭湯のペンキ絵のようなものだ。桂離宮を創った同じ日本人が、よくもあんなばかげたものを建てて、いまだに焼き払わないでいるのが不思議だ！」（加藤周一「同時代とは何か」からタウトの言葉のくだり）

日本文化とは何か

日光東照宮（桂離宮の対極にある日本の美意識）



比庵筆「雨の宿」1975 年（昭和 50）92 歳
紙本着彩 34.5×38.0 cm 笠岡市立竹喬美術館蔵
一山の雨の中にてわが宿をうつ音こそはあはれなりけれ 比庵 九十三



比庵筆「月上る」（川合玉堂合作）制作年不詳 紙本墨書 43.5×31.8 cm ワコースポーツ・文化振興財団蔵
山高く水長きその一とこ銀にぼかして月ののぼりたり 比庵

日本画家の川合玉堂らの力で無名の比庵は世に出た。玉堂は比庵を唯一「先生」と呼んだという。玉堂は比庵の歌や書を愛し、比庵の書画展を賛助しつづけた。